

---

# 契約の代価外伝 - 三千世界の鴉を殺し -

織田撫子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

契約の代価外伝 - 三千世界の鴉を殺し -

### 【Nコード】

N9875V

### 【作者名】

織田撫子

### 【あらすじ】

契約の代価外伝 アルカード編

最強の吸血鬼

ノーライフキング

ロードオブヴァンパイア

不死の王

ピジョン・ブラッド・ヴァンパイア

クリムゾンネメシス

いくつもの呼び名を持つ吸血鬼、アルカード・ドラクレスティ。  
夜を統べる闇の覇者、アルカード・ドラクレスティの過去。  
それは戦争、闘争、殺戮が成す、血の河のせせらぎ。

アットノベルスにて同作品掲載中です。

## 1 - DAWN

1431年

ツアラ・ロムネヤスカ公国 通称ワラキア公国

今は既に亡き、森深き河畔の小国。

私はこの地に、貴族であり、ドラゴン騎士団員である父の二男として生を受けた。

厳格で勇猛な父、聡明で美しい母、強く優しい兄、3人の可愛い弟たち。屋敷の前が処刑場であったことを除けば、幸福な子供だったと思う。

「お父様、この刑場で処刑されるのが女の人ばかりなのはなぜですか？ 彼女達は何をしたのですか？」

毎日のように家の前で処刑される女達が、火炙りにされ悶え苦しむ様を見つめながら父に尋ねた。

3

「あの女たちは魔女裁判で有罪になった魔女だよ」

「魔女？」

「悪魔と契約をした罪深き女の事だよ」

「罪？罪を犯したのですか？ 魔女は悪い事をするのですか？」

「魔女は何もしなくても、存在するだけで罪なんだ」

敬虔な正教徒であった父は、竜騎士に叙任され「竜公」という渾名にとても誇りを持っており、私にも熱心に神の教えを説いた。

両親の熱心な信仰と、目の前で死んでいく魔女達を見て育った私も、当然の様に正教会に信心した。

今思えば、幼少の頃から人が惨殺される様を見て育つことが幸せだったとは思えないが、当時の私には当然のことで、反逆者は殺されてしかるべき、その概念が根付く根底にあったのは、この魔女裁判と処刑だったのだと思う。

私が7歳になった時、父が公国の君主の座に就いた。そこから、私達の運命は大きく変わっていくことになる。

純真ゆえの残酷に満ちた子供時代に終わりを告げたのは12歳の時。

公国は、帝国の藩属国であつたが、父は国の独立に尽力し、断続的に帝国と交戦していた。

父が就任した年に、侵略してきた帝国から国民を救おうとしたことで、父は帝国のスルタンから不興を買った。キリスト教国混成軍、通称ヴァルナ十字軍は帝国に敗走し、元帥ジェイノスに責任があるとして、兄、ミルチャが戦争責任を追及したため、ミルチャもまたジェイノスから恨みを買った。

父と兄が買った恨みは、後に人生を大きく変えるファクターとなる。

侵攻してきたジェイノスから逃れようと帝国に亡命した際、私と下の弟、ラドウは父と共に帝国に拘束された。その間、短期間では

あるが、ミルチャが父の代理として公位に就いていた。

私とラドウを人質に取られ、父は帝国に従属を誓う事を余儀なくされ帰国と復職を果たしたが、私とラドウは12歳から約5年間、帝国の人質として囚われた。

囚われの身でありながら、デウスルメ令により徴兵され、イエニチエリ軍団に従軍したことで、戦争の英才教育を施された。

戦術、戦略、用兵、そして殺し方。イスラム教国家であった帝国の配下にあつたイエニチエリ軍団は、他国から捕虜としてきたキリスト教徒たちで構成されていたため、いざ戦争に駆り出されると抗戦する相手は同じキリスト教徒。

私も同僚も最初はその葛藤に悩まされていたが、徐々にその感覚も麻痺していった。それにより私は疑り深い性格を養うこととなり、狡猾で反抗的で兇暴だとして恐れられていた。

反対にラドウは、その美しい容姿からスルタンの汚い男どもに寵愛を受けて、自らの体と美貌を駆使し、地位を向上させることに妄執するようになり、私はそんな弟を苦々しく感じた。

「お前には竜公の子として、神の子としての誇りはないのか」

「兄様、信仰や誇りで生きていけるなら、男娼のような真似はしませんよ」

ラドウの含みのある笑顔に虫唾が走った。

囚われの身となってから3年後、ハンガリーの摂政となったジェイノスにより、父と兄が暗殺された。二人は自分で墓穴を掘らされ

た上に、生きながら土中に埋められ、無念の死を遂げたと聞いた。

父や兄の仇を討つために、国を取り戻すために、戦うことを決めた。

オスマン帝国、そしてハンガリー。私たちの敵は強大で、それに打ち勝つには一筋縄ではいかない。

戦わなければ勝てない。勝つためには手段は選ばない。

公国にはジェイノスの目論見で、我が一族と敵対する貴族の人間が国王として君臨していた。私は公国の支配を企む帝国の支援でそれを排除し、帝国から解放され、16歳の時に国王に就任した。

しかし2か月で前任者に公位を追われ、同様に、かつては隣国モルドヴァの国王であった伯父の元に身を寄せた。

「ヴラド、俺は絶対にモルドヴァを再興して王位を手に入れるぞ。だから、その時はお前もちゃんとワラキアの王位に就けよ」

「勿論そのつもりだ。俺が先に王位に就いたらステファンが王位に就けるように支援してやる」

「それはこっちのセリフだ。俺が世話してやるからヴラドは待ってろよ」

「いや、俺が先に復職して世話してやる」

「なんだよ、お前負けず嫌いだな！」

「お前もな・・・」

2歳年下の従弟ステファンとはとても気が合って、お互いに復讐と再興を誓い合い、その後もずっといい友人として関係が続いた。

20歳になって、伯父が貴族に暗殺され、ステファンと仇敵ジェイノスの元に身を寄せることになった。

今すぐにも殺してやりたい仇敵。何度毒を盛ろうか、寝首を掻こうか考えたか知れない。だが、私はそれをしなかった。

ジェイノスはジェイノスで何を考えていたのか定かではなかったが、私とステファンを側近として起用し、中央集権や政治の在り方、反大貴族・反ハプスブルク政策などに積極的に携わらせた。勇猛果敢な将軍、そして大変有能な政治家として名高いジェイノスの下で学んだ帝王学や戦術、政治は、私にとってもステファンにとっても大きな財産となった。

26歳を迎えた時、ジェイノスが黒死病で死んだのを機に、公国領内に進攻し、国王に復位し、その翌年にはステファンもモルドヴァの国王となった。

当時、国内では貴族どもの権力争いが過熱していた。

ジェイノスに恭順し、父と兄を裏切った貴族を拷問し、虐殺し、徹底的に弾圧した。残虐、冷酷、非道。何と言われようと構わない。反抗的な貴族は見せしめに、残虐の限りを尽くして殺した。

何よりも、それを喜んだのは領民たちだった。

国内の安定を図る為、政治改革により中央集権化を進め、君主の権力を強化し、軍事改革も行った。経済侵略を企んでいたドイツ人も排斥して、国力も回復させた。

復讐の準備は整った。これからだ。これから私の、私だけの国を作る。

邪魔をする者は皆、死ねばいい。

## 2 - SUNRISE

父と兄の遺志を継ぎ、帝国に対し反旗を翻した。それを許すはずもなく、帝国は大軍を引き連れて、領内に侵攻してくる。

兵糧攻め、焦土作戦、ゲリラ、そして敵兵を惨殺して街道沿いに四肢をばらまき、串刺しにして並べた。

兵士の刺さった槍衾を見た帝国軍は戦意を喪失して、十数万もの大軍でありながら、僅か一万のわが軍の軍門に下った。

その後も連戦連勝。

「少数の兵は将が補う、の見本だ」と評され、猛将、竜の嫡子ドラクレアと渾名された。近隣の小国に私の名が広まるにつれて、帝国に反旗を翻す国も、公国に支援を申し出る国も増えてきた。

そして、政略結婚ではあったが、妻も娶めとった。

美しく聡明で、私と共に国の事を一生懸命考えてくれる妻を心の底から愛したし、妻もまた、私を愛してくれた。

「大丈夫。あなたには私がついているわ。あなたのことを非道だと非難する人もいるけれど、そのおかげで高圧的な貴族や地主たちが領民たちを脅かさずに済んだもの。それに重税を課す帝国だって領民は大嫌いよ。平民まで安心して暮らせて、初めて国と言えるも

のね。私も領民も、みんなあなたを支持して応援しているわ。私にできることはあまりないけれど一緒に素晴らしい国を作りましょう」

いつも妻は、優しく微笑んで、私を慰め、励まし、奮い立たせてくれた。本当に、素晴らしい妻に巡り合えたと思う。

順調な戦果、安定した国内、幸せな家庭。

神の国の建国は目の前だと思っていた。

連戦連勝の猛将と言えど、元来の国力の差から圧倒的不利に変わりはなく、徐々に勢力は衰えていく。そして、弟が帝国に隋軍して攻め入ってきた。

父と兄の遺志を顧みず、敵国に恭順して従軍するラドゥが許せなかった。ラドゥもまた、国王の座を狙っていて、その為に手段を選ばなかった、その結果だという事はわかった。だが、その為にこの兄をも追い落とし、自国領の国民を攻撃するのか。

あいつは、狂っている。

ラドゥは私が弾圧した貴族を糾合し、掌握した。私は弟の率いる

帝国軍と貴族に追われ、トランシルヴァニアへ亡命することとなった。

亡命先のトランシルヴァニアでジェイノスの息子であったハンガリー王と同時に帝国へ攻撃を仕掛けると盟約を結んだが、策略により間諜の疑いをかけられ、ハンガリー王に逮捕監禁された。

「ソロモンの塔」と呼ばれる監獄に監禁されたものの、扱いとしては賓客に等しかった。

疑いが晴れば、ここを出て、国を再興しよう。そう思っていた。だが、裁判は一向に開かれることはなく、そのかわり、ある知らせが届いた。

私が逮捕されたことを嘆き、妻が自殺したと。

私が逮捕されたことで帝国軍が攻め入ってくると思った妻は、戦利品として捕えられ、私のものでなくなる位なら、私を殺す為の道具として利用される位ならと思いつめて、隠れ住んでいた城の天守閣から身を投げ、命を絶った。

私の為に、妻が死んだ。誇りを守るために妻が死んだ。これほど、神に祈りをささげているのに、神は私から国も妻をも奪った。

最愛の妻、エリザベート。

彼女をこの腕に抱くことはもう二度とないのか。

あれの、亜麻色の髪をこの指に絡ませることも、鈴が鳴るような声で囁かれることも、濡れたような黒い瞳で見つめられることも、もうないというのか。

神よ、どうかエリザベートを返してくれ。私には、もはや国も領民も無い。その上、エリザベートまで奪われてしまったら

ヤハウエは私の神ではなかったのか。

祈り、信じれば救われるのではなかったのか。

戦う者に神は降りてくるのではなかったのか。

絶望と憎悪が鎌首をもたげる。

しかし、絶望し、一旦は信仰を捨てかけた私に、神は一筋の救いを与えてくださった。

ある時、ソロモンの塔にステファンが訪れた。

「よお、ヴラド久しぶり。老けたな」

「お前もな。どうした？」

「ちよつと俺の愚痴を聞いてくれ」

「断る」

「あのな、お前の弟をなんとかしろ。鬱陶しくて仕方がない」

「・・・それを私に言われても困るんだが」

私がハンガリーに留まっていた間、公国は弟が支配していた。

私が統治していた頃は、国民の生活と経済の安定を優先させていたし、徹底的に帝国に反抗して、戦争にも勝利していたから隣国の小国との外交も安定していた。

しかし弟は帝国に臣従し、かつての数十倍の奉貢金を支払い続け、国内の情勢は疲弊しきっていた。ステファンの統治していたモルドヴァとの外交関係も最悪で、ことあるごとに敵対しているようだった。更には、近隣諸国に帝国が侵攻しようとしており、弟は帝国への支援を勅命した。

ステファンも私の家系の者を公国の新国王に擁立しようと戦ったらしいが、その新国王候補の男が連戦連敗という結果に終わり、とうとう見限ったらしい。

そこで、モルドヴァとトランシルヴァニアとハンガリーは共闘の盟約を締結し、帝国に対して徹底抗戦の構えを取ることにしたようだ。

「でだ、お前ここから出る」

「それこそ私に言われても困る」

「いい策があるんだ。お前にとってもメリット以外ないはずだ。さあ、姫、こちらへ」

ステファンの従者に連れられて塔に入って来たのはハンガリー王の娘、マリア。

初めて会った瞬間に心を奪われた。エリザベートに生き写しのマリア。神は私にもう一度エリザベートを与えてくださった。新しいエリザベート。欲しい。なんとしても、彼女を手に入れたい。

「ヴラド、お前も帝国軍に対抗する連合軍として参戦しろ。マリア姫を妻として娶る代わりにハンガリー王と同盟を結べ。戦争に勝てばお前は全てを取り戻せる。そうだろう？ ヴラディスラウス3世陛下」

「全く、お前は大した奴だよ。ステファン2世陛下」

それからすぐに、私はステファンの提案通りハンガリー王に口手八丁で盟約を結び付け、その約束と交換にマリアを手に入れた。程なく私はマリアと再婚し、3人の子供をもうけた。

私は再び妻を手に入れることが出来、ステファンの熱い友情に感謝した。

盟約の通り、正教会からカトリックへと改宗し、新しい妻を与えてくださった神に、改めて篤い信仰と忠誠を誓った。

そして、とうとう私は帝国の侵略軍に対抗する旗印として解放された。

隣国と結託して援軍に出ると、帝国軍は侵攻をやめて撤退を始めた。その功績が認められ、45歳で三度公位に返り咲く。

新たな妻も、子も得た。そして地位も奪還した。帝国を撃退し、再び希望が差してきた。

神よ、降りてこい。私はここにいる。

私は神の力だ。ヤハウエに仕える一振りの剣。

異教徒の帝国軍は追い払った。さあ神よ、私の前に降りてこい。

### 3 - SUNSET

帝国軍を撃退し、丘の上で沈む夕日を見つめていた。すると、後方から馬蹄の音が響いた。

振り返った私の目には、薄笑いを浮かべた弟の姿が映った。

「兄上、あなたに神は降りては来ませんよ」

馬上から弟に斬り付けられ、意識を失った。

目を覚ますと、父が暗殺された修道院の前に、枷をつけて引き立てられていた。引き摺られる様に、断頭台へ上る。

断頭台には私の先に処刑されたであろう人間の血が、ぬらぬらと妖しく美しい輝きを放っていた。

「兄上、最後に何かおっしゃりたいことは？」

剣を構えた弟がニヤニヤ笑っている。

神よ、お前はいないのか。

私は、目的も果たせず、もう死んでしまうのか。

私は一体何のために戦ったのだ。

どれほど祈りをささげたか、どれほど信仰し戦ったか、神は見えてはくれなかったのか。

遺志を継ぎ、国の為に尽力したいと思っていた。せつかく友の支援で王位を奪還することができたのに。

このザマは一体なんだ。

憎い

ラドウが、帝国が、ハンガリーが、ジェイノスが、神が、あらゆるものが

憎い

もう神など信じない。神など存在しないのだ。神など死ねばいい。三千世界万物全て、死に絶えればいい。

「皆……死ねばよい」

胸の内に渦巻く憎悪をぶちまける様に、その言葉を発すると、断

頭台の周りの血がざわめく。ズルズルと血が集まってきて、ラドゥに切り付けられた傷口にその血は吸い寄せられるように侵入していった。

「では、まずは兄上に死んでもらいましょう。あの世では神に会い見えるといいですね。さようなら、兄上。アーメン」

愉快そうに笑って、ラドゥは剣を振り降ろした。

沈みかける夕日に血のように赤く染め上げられた修道院の広場で、私は死んだ。

#### 4 - TWILIGHT

私は死んだ瞬間に自らの憎悪と絶望で魔を引き寄せ、吸血鬼の真祖となった。覚醒した際、憎悪と共に能力を暴走させた。

正直、あまり記憶がない。真つ先に食ったのが弟だったことは覚えていいる。その場にいた私を裏切った貴族や帝国軍の兵士全員が、私の腹に収まった。

とりあえず私は、山脈の中に隠された廃城に居を構えた。

最初に能力を暴走させたせいで、自分がどういう者になったのか理解するのはそう難くはなかった。ただ、それに慣れるまでが大変だった。

領民もやはり、敬虔なクリスチャンが多かった。死んだはずの私を見たら領民はどう思うだろうか。帰ってきてくれたと喜ぶか

否、化け物と迫害されるだろう。

幼少の頃の魔女裁判が脳裏に甦る。

実際、私はまごころことなき化け物なのだから。迫害されても詮無きこと。

神を信じている者ならば。

人目に触れないように近隣から人を攫ってきては、血を貪った。あれほど、愛しく思っていた自国の民を私は殺しているのだ。私が生きるために、私に課せられた神の呪い。不死性も、血を欲する体も、呪い。

私は嘆き悲しみながら、貪欲に血をあおった。

その内、国内で噂が立ち始める。

「人が闇にまぎれてひっそりと消えてなくなる」

「元気だった人が急に体調を崩して死んでしまう」

「化け物がいる」

「悪魔がいる」

恐怖は恐怖を呼び、領民たちは震えあがった。

このままでは私の存在が知れてしまう。何か策を講じなければ。その頃、国の端で戦火があがった。

そうだ。帝国の奴らを喰ってやろう。奴らは数だけは無駄に多い。公国の安寧も得られて、帝国を退くこともできる。私の飢えも満たされる。

一石三鳥。

その事に気づいてから、私は帝国の宿営地を襲うようになった。

飢えを満たせるだけでなく、帝国に打撃を。夜な夜な死んでいく兵士に帝国軍は狼狽した。

私は地獄の入り口。ここに入った者は、狼の前のウサギ。私に与えられた餌。恐れ、怯え、命乞いをしろ。処女のように泣き喚ぎ、抵抗しろ。

恐怖と苦悶に歪んだ顔は、最高の調味料。

帝国から送られてくる大量の餌により、私は相当の力をつけた。

ある夜、帝国軍が夜襲を仕掛けようとしているのを見て、胸が高鳴った。もはや、私はただ血を吸うだけでは物足りなくなっていた。

そつだ、戦え。私を戦いに導け。  
殺せ、殺させる。

私に血を、死を、殺戮を。帝国に大打撃を。

帝国軍の前に立ちほだかり、一夜にして夜襲の大隊を全滅させた。

素晴らしい、実に楽しい。この手に死を。この胸に戦火を。

何千、何万の命を吸って、私は昼も活動できるようになった。太陽も、聖水も、十字架も、もはや私には敵ではない。

しかし、その頃公国の国王に就いていた男は、あるうことが帝国に臣従してしまった。戦いが、終わってしまった。

殺したい。殺し足りない。この力を、持てる力を存分に使いたい。

私は殺戮と血を求めて、神聖ローマ帝国へ向かった。向かう途中で、ハンガリーがオーストリアに侵攻していることを知った。

戦争だ。ここにはまだ戦争がある。  
私は嬉々として戦場に身を投じた。

神聖ローマ帝国に身を置くようになってから、私は満たされた生活を送っていた。

帝国内での権力は分裂し、権威と領地を巡る戦火は絶えず、農民や諸侯は反乱を起こし、さらにはオスマン帝国まで侵攻してくる。

ウィーン占拠から始まって、程なくルターと言う男が現れ、宗教革命が勃発し、カトリックとプロテスタントに分かれて各地で戦端が開かれた。

宗教戦争は見ていただけでも実に楽しかった。同じ神を崇めているというのに、解釈の仕方が違ったと言っただけで戦っていた。

異端審問、異教弾圧。実に愉快だった。快感を覚えるほどに。

全く可笑しい。神聖でもローマでも帝国ですらないこの国。実に滑稽だ。

私は戦争に紛れて行っ殺戮を存分に楽しむことができた。

時には騎士団を襲撃した。神に仕え、神の力を自負する騎士団を殺すのはとても爽快だった。神の力など、神の剣など、私の足元にも及ばない。嘲笑が、止まらない。

私は、フランス革命が起きて、神聖ローマ帝国が解体され、戦争が終結するまでの約380年間、帝国領内を放浪して生活した。しかし、帝国が解体し近代国家へと変転していく中、私は退屈した。

長い時間をかけて取り込んだ数百万の命によって、圧倒的な力と不死性を手に入れたが、そのいずれも持て余した。

あまりにも暇で、自らを化け物であると曝け出し、貴族の城や教会を襲った。教会を襲撃したのは我ながら正解だった。

エクソシストや騎士団が次々に送り込まれてきた。

また、神と戦える。

しかし、神の力とは、なんと脆く儂い物か。私に傷一つつける事もあたわず、塵は塵に還っていく。こいつらは神の力などではない。ただ、権威をかさに着ただけのただの貴族の戯れだ。所詮騎士団など、それだけの存在だ。こいつらに比べたら、侵略してきた兵士の方が余程面白い。

折角新しい遊びを得ることができたのに、あまりにもあっけなさを過ぎてすぐに飽きてしまった。仕方なく、私は他の遊びを探すことにした。

時代は産業革命の真ただ中。私は当時の最先進国であったイギリスへ向かった。

## 5 - P O R A L I S

1897年

産業革命の中枢、プロテスタントの国イギリス。

国土は決して広くはない島国でありながら、インドやアフリカにも植民地を置く大国。当時、イギリスの商業的、工業的地位において右に出る国はなかった。急進的に発達を遂げたイギリスは、とても貧富の差の激しい国だった。

上等な燕尾服の貴族と、汗と油にまみれた工夫。町を練り歩く貴婦人と娼婦、笑いあって走り回る子供と浮浪児。

この国には人間の全てがある。なんと美しい国か。

あの娼婦たちに真実の愛とやらを説いて裏切ったらどんな顔をするだろう。

あの浮浪児たちに救いの手を差し伸べて見捨てたらどんな反応をするだろう。

バカな貴族どもに吸血鬼の力を貸すと約束して殺そうとしたらどんな顔で泣くだろう。

考えただけで楽しい。

そつだ、この国では人間の心で遊ぼう。

新しいオモチャを見つけた私は早速若い男に変身した。白く、なめらかな肌、すらりとした舞台俳優のような体躯。輝く金の髪にミステイクなグレーの瞳の貴族然とした美貌。

人間を惹きつける、若く美しい男に。

ロンドンをしばらく徘徊して、綺麗な屋敷を見つけた。

屋敷の管理人に尋ねると、そこはある貴族の別宅で丁度売りに出そうと思っていたという事だった。管理人に案内してもらい、その貴族の代理人である弁護士の屋敷を訪ねた。

「すみません！ お待たせしました！」

スーツを着た金髪碧眼の若い男が笑顔で階段を下りてきた。

「うちの先生は別件で手が離せないみたいで、代理で申し訳ありません」

後ろ頭を掻きながら申し訳なさそうに謝る人の良さそうな男。

「いえ、とんでもありません。私こそ急に押しかけてしまい申し訳ありません」

帽子を取って謝ると、その男は異常なほど恐縮して、いえいえ！と騒いでいた。

「私は弁護士のジュリアス・キングです。よろしくお願ひします」

「ドイツから参りました。アルカード・ドラクレスティと申します。

「こちらこそよろしく願いますね。キング先生」

「わあ！ 先生だなんて！ ジュリアスでいいですよ！」

屋敷の説明や買い取り額を相談して、一段落するとジュリアスは世間話を始めた。

「ドラクレスティ様はドイツの方ですよ？ 貴族の方ですか？」

「ええ。ですが帝国解体と共に国を追われた、名ばかりの伯爵家ですよ」

「爵位をお持ちだったんですね！ 大変失礼いたしました・・・」

「いえいえ。私が申し忘れておりましたから。どうかお気になさらず」

「ドラクレスティ伯爵は、貴族なのに気取ってなくていい人ですね」

「そうですね？ ありがとうございます」

貴族どころか王族だと突っ込みそうになったが、ジュリアスの人懐っこい笑顔に言葉を飲み込んだ。

ジュリアスと話していて、ステファンを思い出した。今頃奴は、ああ、当然墓の中だ。ステファンは私が死んでからも上手く国を纏めて、賢帝と呼ばれるほど偉大な王として君臨し、正教会において聖人に序列されたと聞いた。本当にアイツは大した奴だ。

友として喜ばしく思う反面、羨ましくもあつた。ステファンのお陰で王位の奪還に成功したと言うのに、間もなく謀殺された私にステファンは失望しただろうか。

聖人に叙されたステファンが、神を見限った今の私を見たら失望するだろうか。所詮私には王としての資質がなかったという事なの

か、それとも帝国に反抗したのは間違いだっただのか、今はもうそれを確かめるすべもない。

ただ、父と兄と、そして友の期待を裏切ってしまった自分を、悲しく思った。

私が思索に耽っている間も、適当に返事をしていたためかジュリアスはニコニコと笑いかけながら会話を続けていた。

こいつは、幸せなんだろうな。何もかもが普通で、普通に辛い事があつて普通に楽しい事がある、そう言う幸せな人間なのだろう。

私も生まれた時代が違つたら、別の生き方をしていたのだろうか。私が今の時代に「アルカード・ドラクレスティ伯爵」として生まれてジュリアスと出会つたなら、友と呼べるような関係を築けているかもしれない。いや、考えるだけ無駄なことだな。所詮過去は過去だ。今はもう王族でも貴族でも、ましてや人間ですらない吸血鬼なのだから。

とりあえず、この日は私の話を聞いたうえで先方と交渉してみろという事で、そのまま話し合いを済ませた。

後日、連絡が来て再び屋敷へ向かった。

「先方から承諾いただけました。契約成立ですね。おめでとうございます」

「ジュリアスが尽力してくれたおかげです。ありがとうございます」

「いえー！ 私なんてなにも！ では、こちらにサインをお願いします」

ます」

書類にサインをし、その場で屋敷の代金と仲介料を支払った。書類と代金を受け取ったジュリアスは鞆にそのまま突っ込み、鞆から腕を抜いたはずみで、なにかがハラリと床に落ちた。

「何か落としましたよ」

紙を拾って渡すと、ジュリアスは慌ててすみません！ と受け取る。

「写真ですか？」

「ええ！ 私の婚約者なんです！」

そう言ってジュリアスが押し付けてきた写真を見て、息が止まった。

そこには、花束を抱えて微笑むエリザベートが映っていた。

思わず絶句して固まる私にジュリアスは浮かれたように話し続ける。

「私が言うのもなんですけど、美人でしょう？」

「…ええ、本当に」

欲しい

「来年の春に結婚するんです」

「それは、おめでとございます」

欲しい

「ありがとうございます！ あ、伯爵も式にいらっしやいませんか！？」

「ええ、是非。ありがとうございます」

欲しい

「伯爵においでいただけたら、ミナも喜びます！」

「ありがとうございます。楽しみにしていますね」

ミナ…ミナが欲しい

ミナ。この娘はエリザベートの生まれ変わりだ。そうに違いない。ならば、私が手に入れて当然だ。ジュリアスの婚約者だろうがなんだろうが、知ったことではない。

何をしても、どんな手を使ってでも、必ず手に入れる。

ミナは私のものだ。

## 6・EVENING

しばらく経って、私の屋敷にジュリアスとミナを招いた。

「伯爵！ お招きいただきありがとうございます！ こっちがこの前話した婚約者のミナ・マーレイです」

「お初にお目に掛かります。ミナ・マーレイと申します」

ジュリアスに促されて挨拶をしたミナは優しく微笑んだ。笑顔もエリザベートによく似ていて、一層彼女が欲しくなる。

「初めまして、アルカード・ドラクレスティと申します。先日はジュリアスにお世話になりました、お礼を兼ねて招待させていただきました。それではご案内いたします。お手をどうぞ」

「まあ、ありがとうございます」

差し出した手に、彼女の白く細い手が添えられる。細くやわらかな小さな手。いっそ、このまま連れ去ってしまいたい。

しばらく食事をしながら歓談をした。

「ミナのお父様はクリストファー・マーレイ男爵という方なんですが、植物学者でいらっしやって、彼女も薔薇の品種改良を研究してるんですよ」

「それは素晴らしいですね。あなたの作った薔薇はさぞ美しいでし

よう。よろしかったら今度、拝見させていただけますか？」

「本当ですか？ 嬉しいです。是非、今度うちにもおいで下さい。伯爵と知己になれるなら父も喜びますわ」

難なく彼女から「招待」を得ることができた。これでいつでも彼女の屋敷に侵入できる。

しばらくして、バーに移りジュリアスに酒を飲ませた。ジュリアスは下戸だったようで、あっさり酔っぱらう。

そんなジュリアスをミナは水を飲ませたり、背中をさすったり一生懸命介抱していた。

「ジュリアスは、私が寝室に連れて行きますので、しばしお待ちください」

かいがいしくジュリアスの世話をするミナなど見たくもない。邪魔者にはとっとと消えてもらうことにした。

ジュリアスをベッドに寝かせると、うーん、と唸りながらベッドに潜り込む。このままジュリアスを殺して、彼女を奪おうかとも考えたが、今のままでは彼女は手に入らない。

少し考えて、ジュリアスを吸血した。アルコールが混ざっていて少し不味い。が、これで、しばらくジュリアスは目を覚まさない。おそらく体調不良くらいにはなっている。

「おやすみ、ジュリアス」

そう呟いて寢室を後にした。

バーに戻ると、ミナが一人でグラスを傾けていた。

「お待たせいたしました。ジュリアスはよく眠っていらっしやいますよ」

「そうですか。ご迷惑おかけして申し訳ありません」

「とんでもございません。私がお酒を進めたのが悪かったんですから」

「うふふ。ジュリアスって本当に下戸なんですのよ。強いお酒なんて匂いを嗅いだけで酔う程ですわ」

「ははは。それは難儀ですね。でも少し見てみたい気がします」

「まあ、伯爵ったら。そういうえば、伯爵はご結婚は？」

「今は独身ですよ。妻には先立たれましたので」

「そうでしたの…」

さつきまでの笑顔とは一転、彼女の表情は曇り、悲しそうに俯いた。私の為に悲しんでいるミナを見て、猛烈に愛しく思った。

「寂しくはございませんか？」

心配そうに見上げる彼女が愛おしい。

「ええ、今はジュリアスと言う友人も出来ましたし。大丈夫ですよ」  
「そうですか…」

少しほっとした顔をしたミナはすぐにまた私に顔を向けてくる。

「伯爵、わたくしもおりますわよ」

「え？」

「わたくしも友として、伯爵のおそばにおりますわ」

「ありがとうございます。ミナ、あなたは優しいですね」

「いいえ。当然の事ですわ」

ああ、ダメだ。先に私の心の方がさらわれてしまう。なんと心の美しい娘だ。この心の美しさこそがエリザベートの生まれ変わりの証だ。

友などでは嫌だ。妻にしたい。どうしようもなく欲しい。愛しい。この娘から、愛されたい。

ああ、やはり、ならば、ジュリアスは殺してしまおう。

翌日、ジュリアスを自宅へと送っていった。

「伯爵、すみません。なんだか体調がすぐれなくて……ご迷惑おかけします」

「ただの二日酔いでしょう。じきに良くなりますよ」

この日から徐々に、ジュリアスの体調は悪化していくことになる。

その日から、夜中に侵入してジュリアスを吸血し、昼間はミナと共に  
お見舞いに訪れる。そんな日々が繰り返された。

いつまでたつても体調の回復しないジュリアスにミナは心の底から  
心配して、あらゆる手を尽くして医者を呼び寄せる。

このまま続けていれば、いずれはジュリアスは死ぬだろう。だが、  
それまでずっと、こんなミナの姿を見続けなければならぬ。

「ジュリアス…彼がいなくなってしまうたら…私…」  
「大丈夫。きっと良くなりますよ」

はらはらと涙をこぼすミナを優しく抱きしめる。ジュリアスの為  
に涙を流す彼女を見るのが辛い。

嫉妬が渦巻く。

ジュリアスを襲った帰り、夜道で娼婦に声をかけられた。イライ  
ラしていて、憂さ晴らしのつもりで話に乗った。

ミナの事を思い浮かべながら娼婦を抱くと、少しだけ満たされた  
ような気分になったが、行為が終わると途端に虚無感に苛まれた。  
ああ、空しい。

余計に腹が立って、その場で娼婦を殺した。

それから、その繰り返し。ジュリアスを襲って、ミナの代わりに娼婦を抱いて、殺して、ジュリアスの見舞いに行く。

そんな日々の中で、ある日、出会った娼婦に一筋の光明を見た。殺そうとした時、その娼婦が流した血から異臭が立ち込めた。その娼婦は、ペストに冒されていた。

ああ、この手があったか。そういえば、ジェイノスはペストで死んだのだったな。懐かしい。やはり、怨敵はペストで死ぬのが似合  
いだ。

## 7 - REFLECTION

早速私は娼婦から血を取ってネズミに飲ませ、ジュリアスの屋敷に大量に放った。いいアイデアを思いつかせてくれた礼に、その娼婦は殺さずにおいた。

数日後、まんまとジュリアスはペストに感染した。体力が衰えていたせいか病気の進行は著しく、あつという間に生死の境に足を踏み入れた。

「ミナ、ごめんよ。俺はもう助からない…」

息も絶え絶えに謝るジュリアスの手を取って、ミナはイヤイヤと涙をこぼす。苦しそうに息をしながら、ジュリアスは枕の下から手紙を取り出した。

「ミナ、これをお届けしてくれないか。教授に、必ず、渡してくれ」

「ええ、ええ、わかったわ」

「俺は、悪魔に取り殺されるんだ。誰に言っても無理だけど、彼なら…」

「必ず届けるわ。だから、あなたも頑張って…」

「ミナ、君は悪魔に魅入られないで…教授の言う事をよく聞くんだ。彼なら君を助けてくれる。エイブラハム・ヴァン・ヘルシング教授なら」

ジュリアスの墓の前で、大粒の涙を流し慟哭するミナの肩に優しく腕を回すと、ミナは私の胸に顔を預けて泣き出した。

やっとこの日がやってきた。

邪魔者は消えた。後は、ミナの心の隙に取り入るだけ。墓前だというのに、私は笑いをこらえるのに必死だった。

葬儀の後、ミナを私の屋敷に呼んだ。

枯れ果てたのが、ミナの目にもう涙は見えない。

「ミナ」

優しく声をかけると、悲しそうに顔を歪ませて私に縋り付いてくる。

「伯爵、私はこれからどうしたらいいのでしょうか…ジュリアスのいない生活なんて考えられません…」

「ミナ、気をしっかり持って。大丈夫。私が傍にいますから」

「伯爵…」

「あなたは言った。自分が傍にいると言ってくれた。だから、私もずっとあなたの傍にいますよ。私はどこにもいきません。ずっと、傍にいます」

「伯爵…ありがとうございます」

ぎゅっとミナを抱きしめると、ミナも私の背中に腕を回してきた。

ミナを、抱いてしまいたい。

だが、ジュリアスはまだ死んだばかりだ。まだ早い。

ああ、でも、もう我慢の限界だ。

ミナの目を魔眼で見つめる。

「ミナ、私のものになれ」

「・・・はい」

ミナを寝室に連れて行き、ベッドに横たえる。愛しい、愛しいミナ。ずっと手放したくない。この腕の中にいてほしい。

ふと、思いついた。そうだ。永遠に私のものにする方法がある。

ミナの首筋に顔をうずめて、ミナを吸血した。私の予想が正しければ、ああ、ほら始まった。

ミナは苦しそうに息をし始める。しばらく呻きながら身もだえをすると、すぐに収まった。ミナの口を開いてみると、吸血鬼の牙が生えていた。それを確かめて、私は自分の指を噛み切り、その血を

ミナに飲ませた。

これで、私のモノだ。やっと、手に入った。私の、私だけの【死なない妻】。私は歓喜に震えて、その情を抑えることなく、ミナを抱いた。

「ん…伯爵…え？」

行為を終えて、ミナの髪を撫でながら抱きしめていると、ミナが正気を取り戻した。

「伯爵……え？ まさか…そんな…」

状況を把握したミナは途端に狼狽えだして、泣きだした。

「わたくし……なんてことを…ジュリアスを、裏切るなんて…」

自分の行動が信じられない様子のミナは、激しく動揺して悲嘆に暮れている。涙を流すミナを抱きしめると、ミナは震える声で呟いた。

「伯爵…どうして…」

「すまない。悲しむミナを見ていられなかった。少しの間だけでも、悲しみが薄れるなら、私はいくらでもミナの傍にいる。私はどこにもいかない。ずっとミナの傍にいる。ジュリアスの代わりでもいい。

私を頼ってくれ。君を、愛してる」

「ごめんなさい…伯爵。あなたを利用するようなことをして、本当にごめんなさい」

「ミナ、泣くな。私が望んだことだ。きっとジュリアスもわかってくれる」

「ごめんなさい…。わたくし、酷い女だわ…ごめんなさい」

「ミナは悪くない。悪いのは私だ。ジュリアスが死んで、泣いているミナを見ていられなくて…私は、ミナの支えになりたい。一時でもミナの悲しみが消えるのなら、私はそれでいい」

「伯爵…」

ミナの思考が流れてくる。

【ジュリアスが死んだばかりなのに、なんてことをしてしまったんだろう。伯爵の優しさに付け込んで、酷い事をしてしまった。ジュリアスも裏切って、きつと伯爵も傷つけたわ。でも、伯爵がこれほどまでにわたくしを思ってくれているなんて。彼となら、ジュリアスも許してくれるかもしれない。でも、わたくしはまだジュリアスを愛してる。私はどうしたら…】

ミナの声聴いて、抱きしめる腕により力を込める。

「ミナ、私はジュリアスを忘れて欲しいなんて思っていない。ただ、君を愛してる。それだけだ。私の事など考えなくていい。ただ、ミナに泣いてほしくない。幸せでいて欲しい。それだけだ」

私の言葉を聞いたミナは、再びはらはらと涙をこぼし始めた。とりあえず、今日の所はこのくらいでいい。考える余裕を持たせてやった方が、こっちに都合のいい結論が出る。

「ミナ、君を困らせるようなことをしてすまなかった。今日はもう家に戻って休むといい。屋敷まで送らせてくれ」

その日はミナを屋敷まで送って別れを告げた。やっと手に入った。完全に私の手に落ちるまで、後は時間の問題だ。

それから、私は時折ミナの屋敷に足を運んだ。ただ、ミナと話す、それだけの為に。極力、ミナへの愛情表現を避けて、ミナに触れないように、羊のふりをして。

日に日に、ミナの迷いは大きくなっていく。

## 8 - METEORITE

そして、ジュリアスの墓参りに出かけた日、墓の前でミナは心の中で呟いた。

【ジュリアス、私、伯爵と運命を共にしていいかしら…ジュリアス、赦してくれる？】

その言葉を聞いた瞬間、ジュリアスの墓石を蹴飛ばしてやりたい衝動に駆られた。ああ、可笑しい。お前の女は私が大事にしてやる。お前はそこで指をくわえてみている。

ジュリアスの墓石に向かってほくそ笑んで、ミナの手を取り、墓地を後にした。

夜も更けた墓地からの帰り、ミナが私の屋敷に行きたいと言いつつ出た。絶好の機会。今日、ミナが妻になる。

ソファに腰かけたミナはゆっくりとした口調で口を開いた。

「伯爵、わたくし、あの日からおかしいんです。昼間起きることができず、夜に目覚めご飯も喉を通りません。その代り、別のモノが欲しくて仕方ありません。怖くて知人に聞いてみたら、それはまるで吸血鬼だと言われましたわ。すべてはあの日から」

「伯爵、あなたは吸血鬼なのですか？ わたくしも吸血鬼になったのですか？」

「思いもよらない問いかけに、しばし絶句した。なぜだ？ 何故今までミナのこの思考が聞こえてこなかった？」

「知人？ その知人が何かしたのか？ それとも、ミナがその意志で思考を遮断していた？」

「わからない。」

「だが」

「かえって好都合。」

「そうだ。私は不老不死の吸血鬼。そしてミナ、君も」

「泣くかと思ったが、ミナは苦しそうに顔を歪めただけだった。」

「ミナ、私も君も老いることも死ぬ事もない。若く美しいまま、二人で永遠の時を生きよう。私はミナを愛している。これからもずっと傍にいる。ミナだけを愛し続ける。一緒に生きよう」

「そう言うとミナは苦しそうな顔を振り切って、私に笑顔を向けた。」

「伯爵、嬉しいですね。わたくしもあなたを愛しています。永遠にあなたのお傍におりますわ」

ミナは微笑んで立ち上がると、私の前まで来てゆっくりと腕を開く。私も立ち上がり、ミナを抱きしめると、その瞬間窓ガラスが割れ、背中に激痛が走った。

「ぐっ……」

背中を抑えてその場に座り込むと、玄関からドカドカと足音が聞こえた。私は痛みをこらえ、ミナを連れて上階へ逃げる。

なんだ、これは。どういうことだ。ヴァンパイアハンターか？  
なぜ、私のことが知れた？

寝室に逃げ込むと、下から話し声が聞こえた。

「逃げられたか!？」

「いえ、多分上階です」

「ヘルシング教授、血の跡が上まで続いています」

その声が出た後、階段を上る音が聞こえる。ヘルシング教授……どこかで聞いた名前。確か、ジュリアスがミナに渡した手紙の宛先。

エイブラハム・ヴァン・ヘルシング教授！ そうか、なるほど。ヘルシング教授に求めた“助け”とは病気の事ではなかったのか。ジュリアスめ、やってくれたな。

足音は寢室の前まで近づいてくる。

「くそっ」

私はミナを抱えて、窓から飛んで逃げた。が、背中の傷が回復しない。痛みには耐えかね、地上に降り立ち、背中の傷口を抉る。そこから出てきたのは銀弾。

どうやら、ヘルシング教授と言うのはその道のプロらしいな。わざわざ、こんな弾を用意するとは。背中に埋まった銃弾を全て取り除き立ち上がると、後方にはもう追手が近づいていた。

人間の男が、たった5人。

銀弾を体に受けて、ミナを庇いながら必死に走って逃げた。

ウェストミンスター大聖堂の前に差し掛かったあたりで、急に足に激痛が走り体勢を崩して転倒した。見ると、右足を切り裂かれ、血が流れている。

痛みをこらえて立ち上がろうとすると、剣の切っ先が目の前に現れた。

「伯爵、私はあなたを許しません。あなたを、殺します」

目の前には剣を突きつけたジュリアスが立っていた。

「は…ジュリアス、貴様死んでなかったのか…」

「いえ、死にましたよ。あなたのせいで死んで、あなたのせいで吸血鬼として蘇りました」

「フン、気付いていたのか」

「ええ。あなたがミナを見る目は、狼が羊を見るような眼をしていましたから」

「私とミナの人生を奪った代償は、その命で償っていただきます」

「貴様ごときに私が殺せるものか」

バスカヴィルを召喚し、ジュリアスに差し向けると、あつという間に飲み込まれる。が、ジュリアスはその剣でバスカヴィルを切り裂き、腹から出てきた。

「さっすが伯爵。本物の化け物ですね」

「フン、その剣は銀か？ つまらない真似を」

吸血鬼の能力を発揮して、猛烈な斬撃を繰り出してくるジュリアス。これだけの短期間で、よくも能力を使いこなすものだ。さすがに私の血族だけはある。惜しい。

殺すのには惜しい男だ。だが、殺さねばならない。

バスカヴィル3匹に同時攻撃をさせ、ホロコーストも差し向けると、バスカヴィルに剣を弾き飛ばされて、燃え盛る炎の中で悶えだした。

ジュリアスの窮地に他の4人が飛び出してくる。私はとっさにミナを抱え、大聖堂の屋根に飛び乗った。

ここならばらくは追っては来れまい。しかし、致命的なミスをしたことに気が付いた。もう少して、日が昇る。

私は平気だが、このままではミナが消滅してしまう。どこかに、身を隠さなければ。そう思って屋根裏部屋から中に入ろうとすると、教授たちが階段を上がってくる音が聞こえた。

仕方なく、別の建物に移動しようとミナを抱えると、急に「待って！」と声がかかった。

## 9・MORNING GLOW

「どうした？」

ミナを下ろして尋ねると、俯いたまま口を開く。

「伯爵、わたくしは伯爵を愛しています。心の底から」

「私もだ。ここから逃げ切れたら、永遠に二人で生きよう」

「はい。わたくしは、伯爵と運命を共に致します」

そう言っつてミナが抱き着いてきた瞬間、胸に激痛が走った。

「ぐっ…あ…ミナ、なぜ…お前が…」

回した腕で、ミナは私とミナを、ジュリアスが手にしていた銀の剣で刺し貫いていた。

「伯爵、わたくしは…あなたを愛しています」

剣の刺さった箇所からパキンと石化が始まる。

「ミナ、私も愛している。なのに、何故…」

「伯爵、あなたを愛しています……でも、わたくしは  
」

人間です」

「伯爵…わたくしと一緒に、わたくしが人間である内に、死んでく  
ださい」

朝日が昇る。

曙光と共に石化の進行は一気に加速し、ミナは砂塵となっていく。

「ミナ…消えるな…ミナ、ミナ！」

私一人を残して、ミナの「砂」は風に舞って消えた。呆然とミナの消えて行った空を見つめていると、ドカドカと背後から足音が聞こえた。

「マーレイ嬢をどこへやったんだ？ 伯爵」

銃を構えながら、初老の男が近づいてくる。

「お前が、ヘルシング教授か。私をここまで追い込むとは、大したものだ」

嘲笑するように笑って、胸に刺さった剣を抜く。

「彼女をどこへやったと聞いている」  
「さあな」

返事と共に持っていた剣を教授に向かって投げつけるが、剣は躲かれて虚空を切つて壁に突き刺さり、それと同時にバン！と二つ音が響いて、腹に銀弾を撃ち込まれた。

「彼女まで殺したのか！」

「そう、かもしれないな」

ミナに刺された傷は、辛うじて心臓を逸れているものの、重症だ。銀の剣に斬られた傷も、銀弾による弾創も、修復してくれない。

このままでは、私はこんな、たった5人の男達に倒されてしまう。

「くっくっくっく…ヘルシング教授。お前は、お前たちは本当に大したものだな。倒すという一念のみを持って戦う人間とは、かように素晴らしい物か。この私が逃げを選ぶなど初めてだ。全く持って屈辱だ、だが、嬉しい」

朝日と共に、無数の蝙蝠に姿を変えて、空に飛び立っていく。

「できる事なら1世紀前に会いたかったものだな。実に、楽しかった。君たちは、実にすばらしい。では、諸君、さようなら」

ロンドンから、ドーバー海峡を経て、私はフランスのアブヴィルというコミューンへたどり着いた。河畔の風光明媚な町、歴史的な作りの家が立ち並ぶ街路をふらふらと歩いていると、川沿いの屋敷の前で月明かりに照らされて、美しい女がこちらを見て佇んでいた。

とりあえず、腹が減った。この女を喰おう。そ知らぬふりをしてゆっくりと女に近づくと、女の方から声をかけてきた。

「あなた、吸血鬼よね？」

予想もしなかった言葉に驚いて女の顔を見ると、その女は美しい顔を綻ばせて微笑んだ。

「心配しないで、私もあなたと同類よ。うちにいらっしやい。食料なら山ほどあるわ」

それだけ言うとさっさと屋敷の中に女は入って行ってしまった。どの道他に行く当てもないので私も渋々女に着いて屋敷の中に入ると、屋敷の中は血の匂いが充満していた。

サルーンを抜けて「食糧庫」と呼ばれた部屋に入ると、そこには面白い光景が広がっていた。天井からくさびを打たれて、吊るされたたたくさんの若い男達。見たこともない器具を装着されて泣き叫ぶ若い女達。そのいずれもが、血を流し、それでも生きていた。

「うふふ。ちょっと驚かせてしまったかしら？　気にしないで。お好きなをどうぞ」

そう言うと女は天井からつるされた男の一人の肩にナイフを突き立て、ゆっくり切り裂いてそこから流れ出た血をグラスにとって、ゆっくり味わうように飲んでいた。

私にはこの女のような趣味はなかったので、適当にその辺の奴を食べることにした。

しばらくして、少しは渴きが収まってくると、女は微笑みながら口を開いた。

「私はミラーカ。ミラーカ・カルンシュタイン」

ミラーカ？　…カルンシュタイン、どこかで聞いた名だな。

「ああ、もしかして血の伯爵夫人か」

「よくご存じね。そうよ」

言い当てられた女、ミラーカは嬉しそうに微笑んで、それであるたは？　と尋ねてきた。

「私はアルカード・ドラクレスティ」

自己紹介すると、ミラーカは大きく目を見開いて急に大喜びし始めた。

「本当に！？　あなたがあの不死の王アルカード！？　最強の吸血

鬼アルカード!?」

どうやらミラーカも私の事を知っていたようだ。

「まあ、そうだが。そんな二つ名がついていたとは知らなかったな」  
「私なんて幸運なのかしら！ まさか伝説の吸血鬼に会えるなんて嬉しいわ！」

余程嬉しかったのか、彼女は私の隣に腰かけて目を輝かせて手を握ってきて、部屋で行っている所業からは想像もつかない程明るい笑顔に、思わず苦笑してしまった。

「伝説になるほど長生きも大層なこともした覚えもないがな」  
「そんなことないわ！ 少なくとも私みたいに作られた吸血鬼からしてみれば、あなたのような真祖が存在するだけでも伝説よ！」

興奮して握った手をブンブン振ってくるミラーカに再び苦笑してしまう。ふと、疑問が浮かんだ。

「何故私が真祖だと？」

そう尋ねると、ミラーカは少し興奮が収まったようで、ニコツと微笑んで答えた。

「私、人より少しだけ探知能力が高いのよ。それで、さつき強烈な痺気を感じたものだから屋敷の外に出てみたらあなたが立ってるじゃない？ あなたは本当に、最強という名は伊達ではないわね。本当に強いわ。でも、それは後天的に得た力もあるでしょうけど、先天的なものでもあるわね。だから、真祖だって思ったのよ」

なるほど、それで私が吸血鬼だという事もすぐに分かったのか。しかし、探知能力か。吸血鬼の力にも色々あるものなのだ。

ふうん、と呟きながら考え込んでいると、再びミラーカが口を開いた。

「でも、アルカード。あなた今のままじゃかえって危険ね。力を制御した方がいいわ」

危険？ 何故？ 不思議に思っただけでミラーカを覗き込むと、やっぱりわかってないと言う顔をして溜息を吐いた。

「あなたは今まで闘争に闘争を重ねてきたのでしょね。だから必要なかったかもしれないけど、これから徐々に戦争は減っていくわ。もう、戦いに生きるのは難しくなるでしょう。それよりも、人に紛れて生きる術を身に着けるべきよ。その為にはあなたのその強力な魔力を放出し続けるのは、仇になるわ。必要な時にだけ使えるようにしておいた方が効率的だし、エクソシストだとかヴァンパイアハンターに探知される確率も低くなるわ」

確かに彼女の言う通りかもしれない。産業革命において発展したのは生活だけではなく武器や兵器も新しく高性能なものがどんどん製造されている。

今後戦争が起ころうとも、これまでのような兵力と戦術の戦争ではない。兵器と戦略の戦いになる。昔ほど、戦地で人が戦う事はなくなる。

「確かに言う通りかもしれないが、私は制御などしたこともないし……」  
「それなら心配ないわ！」

ミラーカは私の言葉を遮って立ち上がると、出かけましょう！と急に手を引いて歩き出した。屋敷を出て、そのまま馬車に乗り降り郊外のセルジーという町に着いて、ある一軒の古い屋敷の前で馬車を停めると、さあ行きましょう、と馬車を下りる彼女の後を着いて屋敷に向かった。

年若い門番に招き入れられて入った屋敷は薄暗く、ろうそくのほの明かりだけが揺らめいていた。

しばらく歩き、ある部屋の前で立ち止まりドアをノックすると、中から老人の声でどうぞ、と返事が返ってきた。

「やあミラーカ、いらっしやい。久しぶりだね」

「久しぶりね、マーリン、それとエレインも。相変わらず元気そう  
で何よりよ」

部屋には奥のデスクに老人が一人と、若い女性がその傍に一人控えていた。マーリンと呼ばれた老人は私に目を向けると、彼は驚きながらもこつと微笑んだ。

「ミラーカ、そのお連れさんは吸血鬼かい？ また大層強い人だね」

どうやら、この老人もただの人間ではないようだ。顔中に長いひげを生やし、年老いているにも拘らず大柄なためか強い生命力を感じる男。

ミラーカは私の手を取ると自慢げに私の事をマーリンに紹介し始めた。それを聞いたマーリンはとても驚いて、立ち上がり私の前まで来ると、ようこそと歓迎してくれた。

「いやあ、まさか噂の不死の王に会えるとはね。長生きと言っものはするものだね」

「うふふ、本当ね。それでね、マーリンに今日は頼みごとがあるのよ。アルカードの魔力を制御できるようにしてほしいの。あなたにならできると思って連れて来たのだけど」

「ああ、なんとかやってみるさ」

そう言うと、マーリンはエレインに何かを指示して本棚から何冊か本を取って、パラパラとページをめくり出した。

「ミラーカ、彼は…？」

正体不明のマーリンの事を尋ねると、ミラーカは思い出したようにこちらに振り向いた。

「彼はマーリン・アンブロジウス。至史上最強の魔術師であり、錬金術師よ。彼は人間だけど、その呪術で1400年近く延命している、正真正銘の魔術師」

魔術師、本物に会うのは初めてだ。それにしても人間と言っものは本当に素晴らしい。元々才能もあったのだろうが、それに努力を重ねてここまでになるとは。大したものだ。本当に、人間の探究心、叡智と言っ物は素晴らしい。

血のにじむような努力、諦めの悪さと言ってもいい。それこそが

人間の強みか。

感心している私をよそに、マーリンはエレインに手渡された羊皮紙に水銀のようなものでさらさらと魔方陣を書いていく。描き終わると、何かを呟いた瞬間その羊皮紙の魔方陣が紅く輝いた。

「さて、そろそろ始めるとしようか。アルカード、上着を脱ぎなさい。それと、ちよいと血をおくれよ」

立ち上がったマーリンは私の手を取ると、ナイフで掌を切り裂き、その血を羊皮紙に乗せた。上着を脱ぐと、私の背中にもどうやら魔方陣を私の血で書いているようだ。

「さあ、これで準備は整った。アルカード、心の準備はいいかね？」  
「ああ」

私の返事を聞くとマーリンはにっこりと笑い、私の前に羊皮紙を差し出し、その上に掌をかざして口上を唱え出した。

「偉大なる3つのヘルメスの御名において、我マーリン・アンブロジウスが命じる。龍王の名を継ぐ者よ、滅びの民よ、血の契約の元、紅き龍と白き龍のエリクシールを封印せよ」

そう唱えた瞬間、今度は羊皮紙の魔方陣は白く光り出して、私の身を包んでいた瘴気が薄れて、背中の魔方陣に吸収されていくよう

な感覚がした。

「ああ、成功したようだね」

私の背中まで回り込んで見回していたマーリンは満足そうに微笑んだ。

「アルカード、君は大きな使い魔がいるね。その使い魔を封じる術式をかけた。その使い魔を出したときは、自傷行為で血を出した後に、血の契約を解除せよ、そう言えがいい。ああ、ラテン語でね」「そうか、わかった」

「ただ、君のあの最大の術はあまり使わない方がいいと思うね。だから、そこには特別強い魔力で封印を施しておいたよ」

「構わない。何もなければ使う事はないだろう」

「もし、どうしても使う場合は、ああ、この羊皮紙に書いておいたから、これを詠唱しなさい。それはなくさないように。それと、その術に関しては2つの制限と言う形で対価をもらったからね」

「2つの制限？」

「その術を発動した時には、君の全ての血と力を解放する。そうなれば発動時はただの一人の吸血鬼だ。今の様に不死身に近い状態ではいられないから気を付けるんだよ。それと、君の睡眠時間を以前の3倍に延長した。正確には、そうせざるを得なかったわけだがね。君のその不死身に近い体と力は呪いだ。何と言っても君は自ら魔に身を襲やっした真祖だからね。その呪いを抑える為には、君の睡眠時間で均衡を図らなければならない。君が強くなればなるほど、時間を必要とする。いいかね？」

「・・・ああ、わかった。この礼は何をすれば？」

「いや、君から貰った「リスク」と「時間」。これが対価としては

十分だよ」

「そうか、ありがとう」

マーリンに礼を述べて屋敷を出ようとすると、玄関先までエレインが見送ってくれた。

「アルカード様、ミラーカ様、マーリン様は今日、あなた方に会えてとても喜んでおられました。また、遊びに来てくださいなね」

「ええ、勿論よ。100年くらいしたらまた来るわ」

「さすがに100年は待ち遠しいです」

「何を言っているのよ。あなたもマーリンも私達より長生きじゃない。しかもあなたの方が随分と年上みたいだし」

「まあ、それはそうですが、ミラーカ様はお友達も大勢いらつしやるようですし、今度はお友達も一緒にいらしてくださいね」

「嬉しいわ。そうさせていたたくわね。じゃあエレインもマーリンもお達者だね」

「お二人もお元気で」

「改めてマーリンに礼を伝えておいてくれ」

「かしこまりました。では、お気をつけて」

エレインと別れて再びアブヴィルの屋敷へと戻った。

「ミラーカ、あのエレインと言う女性も魔術師なのか？」

正直、エレインの方がマーリンよりも年上だという事に驚いた。

マーリンが史上最強の魔術師だと言うのに、それ以前から延命術を

使用した者がいたという事かと疑問に思った。

私の質問に、ミラーカはふふつと笑いながら答えた。

「エレインは人間じゃないわよ」

「ああ、そうなのか。では彼女は？」

「彼女は“湖の乙女” いわば妖精よ」

「妖精か。なぜ妖精が人間につき従っているんだ？」

「彼女はマーリンの弟子であり、愛人だからよ」

「なるほど。妖精が弟子入りするほどとは、本当にマーリンは大した男だな」

「彼だつて純粋な人間じゃないわ」

エレインの正体だけでも5本の指に入るほどに驚いていたが、その返答に更に驚いた。

「では、彼はなんだ？」

「マーリンは人間の女とインキュバスのハーフよ。母親がマーリンに洗礼を受けさせたおかげで、彼から邪悪な瘴気は消え、強大な魔力だけが残された」

「それであれ程の魔術師になったわけか。まさか悪魔と人間の子供とは、驚いたな」

「世の中にはもっと面白い人がいっぱいいるわよ。それこそ吸血鬼と人間の子もね。この探知能力のお陰でいろんなタイプの人に出会えて楽しいわよ」

「マーリンと出会ったのもその能力で引き合わされたわけか」

「そうよ。おかげで私もお世話になったわ」

私が戦いに明け暮れている間に、ミラーカはいろんな人物と会って見分を広めていたのか。同じ化け物でも生き方というのはやはり人間同様に違う物なのだな。

私が今まで吸血鬼になってから出会ったのは、ミナ以外は全て敵もしくは餌だった。いや、こうなってしまうえば、ミナでさえ敵であったのかもしれない。状況からして、ミナが伯爵を手引きしていて、最終的には心中するつもりだったのだろう。

私とミナが出会わなければ、こんな結末はなかったはずだ。もし、あの時ジュリアスが写真を見せなければ、そのままジュリアスとミナは結婚して、彼女はジュリアスのモノになっていて、私の手の及ばない存在になっていたはずだ。今頃きつと、二人で幸せに暮らしていたのだろう。

私と出会ってしまったから、ミナもジュリアスも死んだ。本当に私は化け物なのだな。人に死を振りまく事しかできない。なんという憐れな存在だ。

生前から、父も、兄も、妻も、領民も、神が私から愛する者を奪うのは、私に愛する資格も、愛される資格もないという事なのだろうか。

それが、私に課せられた呪いなのだろうか。それならばなぜ、ミナを、エリザベートを思うこの感情を、消し去ってはくれないのだろうか。

神は、残酷だ。人より、悪魔より残酷で、いつそのこと悪辣だ。所詮神はアブラハムの子孫しか救わない。

我が子を贄にするほどの狂信者でなければ、救われない。やはり、

残酷だ。

「アルカード、あなたあの怪我どうしたの？」

思索に耽っていて急に声をかけられハツとした。怪我は未だ治っていないかったか。マーリンの屋敷で上着を脱いだ時に見られたのか。

「別に、ただヴァンパイアハンターにやられただけだ」

「あなたにあれほどの怪我を負わせるなんて大した手練れね。なんていう人？」

「ヘルシング教授と言う男だ」

「ヘルシング教授・・・なんだか聞いたことがあるような・・・そうだわ！ 確かアムステルダムの精神医学の教授よ！ 新聞で彼の記事を読んだ覚えがあるわ」

「精神医学？ なぜ精神医学の教授が化け物狩りなどを・・・」

「精神病患者に吸血鬼がいたとかかしら？」

「わからん、が、ヘルシング教授の本拠がアムステルダムとなればフランスに長居する事は出来ない。これほど世話になって申し訳ないが、私は早々に移動する」

「そうね。どこか異国に移りましょう。あなたも休養が必要でしょうし、その間のことは私に任せて頂戴」

そう言ってミラーカは即座に立ち上がった。

「いや、何もミラーカまで随行することはない。これは私の都合な

「のだから」

「何を言つたよ。ここで会ったのも何かの縁よ。旅は道連れっていうじゃない」

「しかし、そこまで世話になるつもりはない」

「言っておくけど、私だってただでああなたのお世話する気はないわよ。あなた昼間は起きていられるんでしょ？ 昼間の私の護衛、お願いね」

「等価交換か、わかった」

「じゃ、まとまったところで早速準備しましょ！」

それからミラーカはティールームの男女を処分しに足を向けるも、すぐに戻ってきた。

「どうした？」

「このまま放置していた方が面白いわ」

「・・・」

その後、準備が整った私達は話し合いの末、ユーラシア大陸を離れることにした。次の行先は、北アメリカ大陸、アメリカ合衆国。

「品のない国ね」

到着早々、ミラーカはアメリカの様子に文句を垂れた。

時は西部開拓時代真つただ中。南北戦争終結後も国内外で激しく戦火があがり、急激に発展する大国。

イタリヤ人により発見され、その後どんどんヨーロッパ各国の白人が入植し植民地化されていったアメリカ大陸は、「明白な天命」をスローガンに開拓を進め、「自由と民主主義」の理念を形成していく。

「自由と民主主義」を旗印に掲げ原住民を大量虐殺し圧力と合理主義に走った白人は、アフリカや原住民を奴隷として使役し、厳しく迫害・差別した。

後に独立宣言がなされた後もリンカーン大統領の登場まで奴隷制度は続き、撤廃された今もなお、人種差別は根強く残っている。

「人間でなくなっちゃった私達にとっては、愚かとか言いようがないな」

「本当ね、人間は人間。私達にとっては人種が違っただってみんな同じ。血の詰まった袋にしか見えないわ」

「全くだな」

ミラーカと二人でシシリアンマフィアの屋敷を壊滅させ強奪した後、何とか安息の地を得られた私は、それから長期間の休養を必要とした。

屋敷の中に引きこもり、ゆっくりと体を休めて傷を癒す。失われた血も力も十分に回復して休養を終えた私を待っていたのは、新しいアメリカだった。

「うふふ、あなたが休んでる間に随分様変わりしたでしょう？」

「ああ、驚いたな」

屋敷の外に広がるのは黒人のスラム。そのスラムを抜けると、巨大な建物が立ち並ぶ経済の中核ウォール街。

「あなたがサボってる間に面白いイベントを一つ逃したわよ」

「なんだ？」

「世界大戦」

「世界大戦？ 世界規模で戦争が起こったのか？」

「ええ、アメリカ本土は攻撃対象ではなかったけど、アメリカから

も出兵してみたいよ」

「そうか、それは勿体ない事をした」

「それについて2か月ほど前、もっと面白い事が起きたの」

「今度は何だ？」

「世界恐慌。今、アメリカを中心に、世界の経済は大嵐よ」

「アメリカは世界を巻き込むのが趣味か」

「そのようね。それより、約束通り私の護衛をお願いね」

「ああ、わかった」

一通り街を散策して屋敷に戻ると、今度はミラーカが昼寝に入っていた。ひとまず屋敷の中をもう一度見まわってみると、金庫の現金が思ったより少なく感じた。

すぐに思い立って屋敷を出て、銀行へと向かった。目的は当然、銀行強盗だ。

と言ってもさすがの私も銀行強盗は初体験だ。銀行に入って中の様子を見回してどの様に強盗しようか思案していると、後方のドアから帽子をかぶり、高価なウールのスーツを着た3人の男が颯爽と入って来た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9875v/>

---

契約の代価外伝 - 三千世界の鴉を殺し -

2011年11月16日21時50分発行